



： 卷 頭 言 ：

皆既日食と農業

(財)日本植物調節剤研究協会 評議員
日本曹達(株)農業化学品開発Gリーダー

岡本隆之

7月22日午前 46年ぶりの皆既日食が観察されました。生憎日本列島は曇りがちで、観察できたのは一部の地域に限られましたが、欠けていく太陽と月の影から太陽の光が一部分だけ漏れて輝くダイヤモンドリングの映像がテレビをつうじて放映され、自然の神秘を感じさせてくれました。日食は古代から重大な関心がもたれていたようで、「日本書紀」にも記録があります。また源平合戦では、天文博士のいる朝廷側の平家が日食がおこることを知っていて、太陽が欠けていくことに恐れ混乱する木曾源氏に対して戦いを有利にすすめ勝利したとの記述も残っています。日食には人の人生観を変えてしまうような強い力があるようで、46年前高校1年生だった毛利さんが、その体験によって科学者になろうと決意し、宇宙飛行士への道につながったというエピソードもあります。

しかしなんといっても、我々がこの現象によって思いをめぐらせるのは、太陽の恩恵によって生かされているという事実です。地球上に住むすべての生き物が存在することができるのは、太陽からくるエネルギーによるものですし、農業も太陽エネルギーを利用して、緑色植物から有機物を生産し、人間の食糧とする営みといえるでしょう。人間は生きていくために必要な栄養素の多くを穀物から摂取しています。肉、卵、乳製品なども間接的には穀物を飼料として利用しますので、これを考慮すると供給カロリーの大部分が穀物由来といえるでしょう。この穀物価格が昨年高騰し、大きな問題となりました。現在は沈静化しているものの成長著しい中国が新たな食糧輸入大国になりつつあること、バイオ燃料によるエネルギー市場と食糧市場の競合、異常気象の頻発等により再び食糧の世界的な争奪戦がおこる危険性は十分

にあります。

インターネットで調べると、現在の世界人口は、68億553万2330人で、1分ごとに140人、1日で20万人、1年で8千万人も増えているということです。また8億5千万人が深刻な栄養不足、飢餓に苦しんでいます。今後は食糧増産が追いつかずさらに世界規模での食糧危機がおこることも懸念されます。耕作面積に限りがあるなか、収量を高めるため、農業を有効、適切に使用していくことは解決手段の一つとして重要であることは間違いありません。農業メーカーにいるものとしてあらためて太陽や地球の恩恵、そして将来を含めた食料供給確保と、農業の果たす役割について考えさせられました。

小職は、今年3月まで5年間、駐在員としてドイツに暮らしておりました。EUでは新たな化学品規制[REACH]の導入や厳しくなる農業登録制度に対応しながらビジネスを維持するため、情報収集含め大変な部分もありましたが、食糧価格高騰に対応して減反政策が撤廃されるなど、農業マーケットにとっての追い風も経験しました。なにより工業国であるドイツであつても一定の穀物自給率を維持しながら美しい農村風景を守っている姿に触れ感銘を受けました。

26年後の2035年には本州で皆既日食を観察することができるそうです。そのときには日本の農業は、そして世界の食糧事情はどうなっているのでしょうか。もちろん雑草や病害虫との戦いは絶え間なく続いているでしょうし、革新的な農業が登場し大きな役割を果たしているものと思います。今回はテレビの映像ではなく直接皆既日食を観察し、感動に浸りたいものです。